

---

# 【まどか マギカ】もしも感情（こころ）があったなら。

コリ たつや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【まどか マギカ】もしも感情があつたなら。

### 【Nコード】

N4146T

### 【作者名】

コリ たつや

### 【あらすじ】

アニメを最終話まで見た方を対象として書いております。アニメ最終話による世界再構築後の話なので、各キャラの設定が少し異なります。宇宙を蝕む魔獣を討伐すべく、地球の日本という国にある見滝原町に派遣されたインキュベーター「キュウベえ」は、そこで出会った地球人の少女を、感情エネルギーを魔法として利用する能力を持つ『魔法少女』にするのが役目である。そんなキュウベえには、小さな悩み事があった……。

## ロジック

……人間には、感情というものが存在する。

僕らからみればそれは病のようなものでしかない。  
それが、脳にできた悪性腫瘍のようなもの。

でも、それはあまりにも絶大なエネルギーを生む。

一体どういうロジックでこのようなことが起こるのか。  
感情のエネルギー化を発明した僕らにも、よくわからない。

人間は、脳から発せられる微弱な電気で動いている。  
魔法は、感情から発せられる絶大なエネルギーで発動する。

だけど、なぜ脳から電気エネルギーが発せられるのか。  
そして、なぜ感情からエネルギーが発せられるのか。

……僕には、わけがわからないよ。

それは、価値あるもののなのよ。」「1」

やあ。僕はキユウベえ。

今日も愚かな人間たちが蔓延るこの町の名前は見滝原町。みたきはらちよう  
ここんとこの僕の職場さ。……なんてね。

知ってるよ。……君は別の時間軸の人間だろう？  
いや、別次元というべきかな？

残念だけど、君達の世界のエネルギーは目減りしている傾向にある  
ようだね。

無理は言わないけど、省エネくらいは心がけておくれよ？

僕だったら省エネなんていわず、世界のために命を投げ出すけど。  
まあ、僕が死んでもエネルギーは生まれないからね。

それにしても、せっかく君たち人間は多大なエネルギーを生みだせる  
個体に  
生まれたというのに、なぜ自己犠牲を嫌がるのかな？……困ったも  
のだよ。

といっても、僕らの世界はそういうのには特に困っていないから、  
関係ないけどね。

残念だったね、画面の向こう側の君。

僕たちは人々の感情をエネルギーに変換する技術を作り出した。

効率は悪いけれど、人々の『呪い』を集めてはエネルギーに変換し  
ている。

そうして宇宙のエネルギーを保つことに成功しているよ。エネルギーも無限だし。

……さて、君たちの世界はいずれ崩壊に向かうだろう。

でも、諦めたらそれまでだ。……君なら運命を変えられる。

避けようのない滅びも、嘆きも、全て君が覆せばいい。

そのための力が、君には備わっているんだから。

「だから、多分存在するであろうそっちの世界の僕と契約を……」

「……アニメの中の登場人物に何を話しかけてるの？」

僕が黒いパネルに移る人間に話しかけていると、後ろにいる少女が黒い髪をなびかせ、僕に話しかてくる。

「人間はこの類の映像をアニメと呼んでいるんだね。」

率直に、不思議だと思った。

人間たちは、同じ映像でもそれが絵であるか実写であるかで呼び方を変えるのだ。

「何かしら、その『僕らの認識と違う』みたいな言い方は。」

「きっと、君たち人間はこれを君たちが作り出した産物と思っているのだろう?」

「そうですね。この絵も、声も、物語も、人間が作り出したものよ。ちょうど今、PCで小説を読んでいるこの人も、人々が作り出した絵であって。」

エネルギーの無駄遣いを続けるこの黒いパネルには、PCを使い、ネットワークを通じて小説を読んでいる人間の姿が映し出されていた。

所詮これは絵でしかない。

だが、決してそれが生きていないわけではないのだ。

「僕たちはね、この世には因果律、時間軸があることを知っている。」

「それが、どうかしたの?」

「人間には『創作』という趣味をもつ特殊なタイプがいるらしいね。これは僕らの中では有名な仮説なんだけど……。」

少女は小さく嘲るように鼻で笑う。

「お前が仮説を語るだなんて、珍しいわね。」

「僕らも、全てを知っているわけではないんだよ。」

……彼らは別の時間軸の情報を夢とか、突然の発想などと称して

ほんの少しだけ受信している可能性があるんだ。君のようにね。」

「つまり、今こっちをカメラ目線でみてるアニメのキャラは、どこか別の時間軸できちんと生きている……。そう言いたいよね。」

「仮説だけだね。」

「でも、私の話は創作なんかじゃないわよ。」

「そうかい、時間逆行者ほむら。……君が時間を逆行したのなんて見たことがないけど。」

「いつか、君はその話をアニメとして発表するといいよ。タイトルは、そうだなあ……。」

彼女は暁美ほむら。

僕と契約したわけでもないのに、突如魔法少女として現れた正体不明の少女だ。

正体不明……。とはいえども、どのような経緯で魔法少女になったのか、

どのような経緯で今ここにいるのかを彼女は僕に語ってくれている。

だがそれは理解はできても夢物語でしかなく、

人間がよく使う『嘘』にカデコライズされる話であると僕は分析している。

故に正体不明なのだ。

「バカにしているのかしら?」

「いいや、とてもよくできた話だと思うよ。矛盾もない。  
非常によくできたプロットだと僕はとても感心するよ。」

「感心する、なんて。感情のないお前が言っても皮肉にしか聞こえないわ。」

「気付かなかったのかい？」

「もちろん気付いていたわ。お前も皮肉が言えるようになったのね。」

暁美ほむらは嬉しそうな口調で話すが、表情はまったくもって嬉しそうではない。

……これだから、人間の感情っていうのはわかりづらいんだ。

「君はいつも皮肉ばかりだけどね。……さあ、今日も瘴気が濃いね。」

「ええ、……準備運動にしかならなさそうだけれどね。」

「そこは、準備運動にもならない、じゃないのかい？」

「お前が隣にいただけで、不快で私はいつも過呼吸よ。」

「有酸素運動か。いいじゃないか、効果的だよ。」

互いに意味もなく皮肉を言いあうと、僕たちは宇宙を蝕む魔獣の群れへと飛び込んだ。

それは、価値あるもののなのよ。」「2」

「ねえ、キュウベえ？」

静かに時が流れる部屋の中で、静寂を破ったのは少女の声だった。

彼女は、『寂しい』という感情をもって僕を呼んだ。

僕もさすがに慣れてきたのか、この少女の感情を読み取るは容易かった。

「どうしたんだい？」

「私たちはどこから来て、一体これからどこに向かうのかしら。」

「哲学にでも目覚めたのかい？バマミ。」

「いえ……。少し、自分がわからなくなっただけよ。」

彼女の孤独を癒せるのは、同じ魔法少女の知り合いある曉美ほむらと佐倉杏子だけ。

……僕では彼女を癒せない。だが、それでも受け止めることは許されるようだ。

僕が彼女と契約する時に手渡した彼女自身の魂から作り出した「ソウルジェム」という宝石は、彼女の現在持っている魔力の量を教えてくれる。

それが濁っていれば濁っているほど、魔力はなくなっているということ。

「マミ。確かに今、君は寂しさを抱えているかもしれない。  
でも、決して絶望してはだめだ。魔法少女は希望を作り出す存在  
なんだから。」

「わかってる……。わかってるの、キュウベえ。」

感情のエネルギーは魔力の源だ。

彼女の濁り始めているソウルジェムを見ると、  
言葉を介さずとも彼女の心が濁っているのがわかる。  
そして……、心が濁れば魔力が濁る。

そうなると魔獣に勝てる可能性が減るので、こちらとしては嬉しく  
ない。

特に、バマミは人間にしては珍しく好戦的に魔獣と戦ってくれるの  
で、ありがたいのだ。

これまで、彼女だけでどれだけの『呪い』を集めてくれたことが。

「君は魔法少女としての職務を全うしているよ。それも、かなり上  
出来に。」

「そ、そうかな……。」

「君が他の魔法少女とは比べ物にならないほど魔獣を倒してくれて  
いるおかげで、  
今日もこの町は、この世界は平和なんだ。君が世界の平和を守って  
いるんだよ。」

これほど使える人材はいない。これほどの人材をみすみす捨てる理

由などない。

だから僕は、バマミが寂しそうにしているときは側にいることにしたのだ。

それだけで彼女の魔力の低下をある程度抑えられるのだから、お安い御用だ。

「ありがとう。……ごめんね？少し、泣かせて。」

「……うん。少し泣いて落ち着くといい。  
落ち着いたら、またマミのおいしい紅茶を飲ませてよ。」

バマミは静かにうなずくと、普段上品に振舞っている彼女も少々はしたなく嗚咽をあげながら大粒の涙を流す。

だが、それは仕方のないことなのだ。

彼女は魔法『少女』。少女なのだから。

「美樹さんが導かれてから、もうどれくらい経ったのかな……。」

唯一、彼女のことを慕っていた同業者の美樹さやかは、

正確に言うならば 9年11ヶ月12日8時間24分38秒02  
前に、

円環の理に導かれて、この世を去った。

えんかん ことわり  
円環の理……。

魔法少女にとっての死と救済を同時に意味する言葉だ。

絶望に打ちのめされ魔力が尽きた少女に、  
絶大な力を持つ女神が救済の手を差し伸べ、救われた世界へと導く。

そのように魔法少女たちに伝わっている口伝である。

彼女が旅立ってから数年間、バマミは孤独に振るえ悲しんできた。

「どれくらい経ったかは、カレンダーソフトを開けばわかるはずさ。それをしないのは、君自身がそれをしたくないからだろう？  
なら、それを無意味に聞かないほうがいい。余計辛くなるだけさ。」

「うつ……。うつ……。」

あれから約10年経った今も、彼女は体も心も成長しないままである。

……だがそれは、当たり前だ。

魔法少女として最大の力を発揮できるのは、感情が大きく揺れ動く第二次性長期を迎えた少女だ。

なので魔法少女になったその日から、彼女たちの魂と体は、第二次性長期を迎えてしばらくするまでは成長も老化もしないようになっている。

バマミも、佐倉杏子も、暁美ほむらも、あの時のままなのだ。

この10年間の彼女達の身体的及び精神的成長は、誤差レベルの微細なものだった。

それ故に彼女たちは表立った行動ができなくなり、隠れるように暮らしている。

人間とは不思議なもので、たかが10年間成長しない個体がいることを

やけに気味悪がり、その個体を群れから追放しようとするのだ。

それは魔法少女である彼女たちも同じで、自分たちの成長・老化を止めたことを

彼女たちに伝えたときは、酷い目にあつたものである。

「君は一人じゃない。仲が良いってわけじゃないのかもしれないけど、

佐倉杏子も、暁美ほむらも君の味方だ。……僕だってその一人だよ。」

「一人じゃない……。」

『一人じゃない。』人間はなぜかこの言葉を異様に愛する。

小説にも、漫画にも、はたまた歌にも、この言葉は頻繁に登場する。

確かに他の個体と連携が取れば役に立つが、人間たちのそれはあまりに異常だ。

『一人では生きていけない』などというトンデモ理論を叩き出すのだから。

「やっぱり、ママも一人じゃないのが嬉しいのかい？」

「……そうね。嬉しいわ。改めて言われると、なんだろう、すごく嬉しい。」

「それはやっぱり、感情がないとわからないことなんだろうね。」

「キュウベえは、私といっても何も感じない？」

「僕が何を思うかは関係無い、重要なのは君さ。  
君に落ち込まれると僕も、同時に世界みんなが困る。」

「……うん、なんだか泣いたらスッキリしちゃった。ありがとうキ  
ュウベえ。」

さあて、これからの世界の平和はこの魔法少女巴マミが  
ガンガン守りまくっちゃいますからねーっ！」

マミはどこか懐かしい響きのするセリフを吐くと、  
精一杯の明るい表情をし、拳を上突き上げる。

それが作られた笑顔なのか、本当の笑顔なのか、僕に知る由はない。

どうやら、僕の仕事は終わったようだ。マミが作ってくれた紅茶と  
ケーキを頂くと、

その意気でこれからも頑張ろうと伝えて、寂れた部屋から外へと抜  
け出す。

部屋から抜ける瞬間、暁美ほむらが部屋に向かってくる気配を感じ  
た。

巴マミのことは彼女に任せておけば大丈夫だろう。

全く、人間とは不思議なものだ。

そんなことを思いながらも僕はもう一人の魔法少女の元へ向かった。

それは、価値あるものなのよ。」「3」

「うおおおっ！！」

夜の虚空に不釣合いな幼い声が響き渡る。

声の響きは幼いものの、それは他の人間の雄叫びとはどこか違う重みを持っていた。

「今日も大量だね。毎日お疲れ様、杏子。」

「やめろ気持ち悪い。てめえここ最近妙に馴れ馴れしいな。」

この少女、佐倉杏子は現存する魔法少女の中でもかなりのベテランで、

あの巴ミミを凌駕する量の魔獣を狩り、現在も討伐量のトップである。

魔法少女は上級魔獣が落とす『グリーンキューブ』を使って魔力を回復しなければ、いつか魔力を失い、同時に魂を失うことになる。

なので魔力を回復できる量のキューブを集めるのは当たり前なのだが、仕事熱心な彼女は自分にとって不必要なほどのキューブを集めていた。

そして、マミと同じくキューブを落とさない下級魔獣も討伐してくれていた。

それは僕にとっても世界にとってもありがたいことだ。

「いや、最近の君は本当にすごいよ。」

昔の君といたら、必要最低限の狩りしかないサボり魔だったのに。」

「心境の変化だよ、心境の変化。お前みたいな感情なしにはわからねえだろうけどな。」

「全く。せっかく僕が友好的に接しているというのになぜ君はそれを拒むんだい？」

「悪いけど、あたしはお前と馴れ合いながらやっていくつもりはねーよ。」

彼女が精力的に活動を開始したのは、美樹さやかが導かれてからだっただろうか。

美樹さやかは、自身の幼馴染であり思い人であった上条恭介の腕の故障を癒すことと引き換えに、魔法少女となった。

その後、彼女の憧れであり先輩のマミと共に魔獣狩りに身を投じていくが、

それ故に同級生及びクラスメイトとの交流ができず、孤立。

それでも彼女は自分の町の人々を守るために、魔獣狩りを続ける。

戦いの運命を受け入れてまで救った上条恭介は、何らかの奇跡で腕が治ったことは理解するも、さやかによるものだと気付くことは無かった。

そして、さやかの恋は成就することはなく、  
上条恭介はクラスメイトの志筑仁美と結ばれる。

……それからの美樹さやかの人生は、あまりにも短く、あまりにも  
悲惨だった。

「……さやかは自分の意思で自分の惚れた相手の為に命を投げ出し  
た。」

「そうだね。昔の君はいつも僕のせいにしていたけど、決してそう  
じゃないんだよ。」

必要最低限の狩りしかしない魔法少女を軽蔑し、自分の得にならない  
狩りも  
積極的に行っていた彼女だったが、彼女はさらに自分の利得を放棄  
する。

グリーンキューブを落とさない下級魔獣を重点的に狙い始めたのだ。  
必要以上の狩りをしない魔法少女は、キューブを落とす上級魔獣を  
狙うのが常である。  
なので、狩られること無く野放しになった下級魔獣は平然と人間を  
苦しめていた。

それを良しとしない彼女は、自分を犠牲にして下級魔獣を狩り続け  
る。

……犠牲と言えば聞こえはいい。だがあれはそういうものとは違っ  
た。

自暴自棄になっていたただけなのだ。

「決して？……バカいうな。てめえがさやかの人に現れなければ、あいつが死ぬことはなかった。てめえにも責任はあるんだよ。」

「僕は選択肢を与えただけだよ。その道を選んだのは、他の誰でもないさやかだ。」

「それはわかってるよ。アイツは自分の意思で魔法少女になったんだ。」

でも、そんな選択肢を無責任に与えたヤツを許せるほど、あたしは優しくないんだよ。」

魔力が減ることに美樹さやかの心は濁っていき、感情的になることが増えた。

そのときの彼女は自分のことを完全に嫌っていた。感情的になった後、自分を責める。これを幾度と無く繰り返していた。

最終的に、魔力の低下と環境による心の濁りによって彼女は暴走し、命を掛けて守るはずであった町民を傷つける。

そのことに対しての自己嫌悪と、周りの人間を嫌う心が交差して心が濁りきった結果、

彼女は下級魔獣との戦いで低下しきった魔力を使い果たし、魂を失う。

彼女が最後に放った言葉も、あまりに悲しい自己嫌悪。

「『あたしって、ほんとバカ。』」

「……ッ。……てめえ、喧嘩売ってるのか？」

「いや、つい思い出してしまっただけさ。……本当にわけがわからなかった。

彼女は人を救う為に命を賭して戦った。そのおかげであの少年も幸せに暮らしている。」

悲しい終わり方をした彼女だったが、

それでも彼女が救った命は今も健やかに生き続けている。

彼女によって救われた命ということは、本人たちが知ることは無いであろうが。

「傷つけてしまった人もいるけど、彼女が救った命の方が明らかに多い。

だというのになぜ、彼女は最後まで自分を責めて続けていたんだろうね。」

「誰かの幸せを祈った分、他の誰かを呪わずにはいられない。あいつはそう言ったよ。

だから同じように、誰かを呪ってしまった分、自分を呪ったのかもしれないな。」

僕もその会話が聞こえていなかったわけじゃない。

僕と少し離れたところで起きた出来事だったが、彼女達の会話は受信していた。

「悪いけど、聞き耳を立てさせてもらっていたよ。

たしかそれは、君の理論を基にして作り出した理論だったね。」

杏子は少し苦しそうな顔で、小さくうなずいた。

彼女の死はあのような発言をした自分のせいかもしれないと思っているのだろうか？

だが、彼女の理論は間違っていない。

『希望と絶望の差し引きは0』。その通りである。

希望によって生み出される魔力と絶望によって打ち消される魔力は比例するのだ。

「その理論を元にするなら、さやかは少しでも報われて良かったんじゃないかな？」

「何をいまさら。てめえがこんな体にしなかったらあいつは……。」

「魂の場所が違うからという理由で愛し合うこともできないんで、意味がわからないね。」

僕は愛を知らないけれど、少なくとも君たちにとっては大きな意味を持つのだろうか？」

「そりゃあ、まあ……。」

「彼女は上条恭介と結ばれたかったんだろ？それを願って、それは叶わず絶望することとなる。これで差し引き0じゃないか。」

上条恭介の腕を治した希望のエネルギーも、美樹さやかが、自分の魂がソウルジェムの中にあることを知った際に消失したエネルギーで清算されている。

「なのにその後、身を削って戦って。あれは完全に蛇足だった。」

「違うわ。彼女の願いは叶えられた。だから、彼女は何も憎まずに去ったのよ。」

突然、杏子とは違う声がする。

振り向くと、マミと二人で立っている暁美ほむらの姿があった。先ほどから気配はしていたが、突然会話に割り込むのはやめて欲しいものだ。

「確かに、叶ったね。上条恭介の腕は完治した。でもそれは本当の願いじゃなかっただろう？」

「そうね。あの子が本当に願ったのは、それも直接関係するけど、それじゃない。」

「惚れた男と結ばれたかった、それと、魔獣から町民を守りたかった。だろ？」

杏子が懐かしそうに、『あいつはバカだよな』と小さく微笑む。だが、それにたいして暁美ほむらは横に首を振った。

「やはり、あなたたちは聞こえてなかったのね。あの子、最後に言ったのよ。」

もう一度、アイツの演奏が聴きたかっただけなんだ。もう何の後悔もないってね。」

「また、得意の創作かい？」

「事実よ。魔法少女が円環の理に導かれるとき、その少女の絶望が全て浄化されることくらい知っているでしょう？」

「まあ、それも含めれば仮説としては成り立つね。

でも、人間はたかが演奏を聴きたいという理由だけで、命を投げ出すものなのかい？」

「当然よ。それが愛した相手のものならば。」

「それはやっぱり、感情がないとわからないものなのかな？」

「そうね。お前には永遠にわからないわ。」

僕には永遠にわからない。僕自身もそう感じた。

音楽を聴くただけに戦いの運命を受け入れる？そんなバカな。愛した相手と結ばれたいという欲望が人間には存在することは知っている。

だが、そのようなパターンは初めて耳にした。

感情とは一体何なのだろう？

そのような理由で命を落とすのなら、あまりにも意味のない疾患だ。

でも、感情は大いなるエネルギーを生み出す。無意味なものであるとは考えづらい。

僕が思考をめぐらせていると、ほむらとマミが突然変身する。  
新たな魔獣が現れたようだ。どうも最近、この辺りは魔獣が多い。

彼女達のような実力者が三人もいれば何の問題もない。

僕は少しここで思考の旅を楽しむことにした。

それは、価値あるものなのよ。」「4」

現在、6週間連続でオリコンチャート1位を獲得している、  
ついにはトリプルミリオンセールを達成した

名曲中の名曲ともいえる曲が、この店内にも流れている。

共感どころか理解することすら難しいと言われる歌詞と、  
耳ではなく心臓に直接響くといわれるこのフレーズは、  
どちらも上条恭介によって作られたものである。

上条恭介はバイオニストであり、一時期は『天才』と呼ばれていた  
ものの、

彼の痛ましい程の努力を前に才能などという概念はあつてないよう  
なもので、

「神に愛された男がその愛すらも越えた」と国境を越えて話題にな  
っている男だ。

約10年前、さやかに幸せを祈られた本人である。

この曲はそのさやかへの思いを歌った歌である。

…… 本人は何も語らないが、当事者である僕にはわかる。

そして、そのボーカルを努めるのは、

ピアニスト兼ボーカリストである志筑仁美だ。

…… 彼女も強くなったものだ。

さやかが導かれてから数ヶ月間、

「私が殺した」とパニックになっていたのを思い出す。

だが、数ヶ月なのだ。

数年の間苦しみ続けた恭介と違い、彼女の心は強かった。中学生にして、罪を償うために生きることを決意したのだから。

魔獣の結界内で消滅し、行方不明となったさやかが  
今も生きていると信じ探し続けている二人の姿は、少し痛々しい。

魔法少女の最後は、一般人に気づかれることはない。  
皮肉なことに、これが彼らの生きる希望となっているのだ。

有名になれば、力を持てば、彼女を探し出せる。

……そんな淡い希望を胸に生きているのだろう。

『記憶の中でしか見えない君の 笑顔さえおぼろげになっていく。  
ヘッドホンからmeler微かな音を僕は聞き取っていた。』

店内に流れているというのに、同曲をヘッドホンで聴きながら、  
顔を渋らせて俯くこの少年の名を、僕は知っている。

だが、知っているだけであり接触を試みたことはないので、  
こちらが一方的に知っているだけなのだ。

彼の名前は、鹿目タツヤ。

ほむら曰く、円環の女神の弟にあたる存在。

……もちろん、円環の女神なんて聞いたこともないし、

誰一人としてそれを観測したものはいない。ほむらは別として。

この少年には姉がいたという情報もなく、正直言って彼女の妄言がなければ僕がこんな一般人に興味を持つことはなかっただろう。

数ヶ月に一度、軽く彼の姿を見る程度ではあれど、約10年もの間彼を見続けてきたのもあって、彼が完全な一般人であることに僕は確信を持っている。

「……………まどか……………」

なおも俯いたままの少年は、架空の姉の名を口にする。

『まどか』とは、鹿目タツヤの妄想が生み出した人物である。

彼は絵画、イラストが趣味のようで、よくその『まどか』の姿を紙に描いている。  
ほむらの創作に登場する『まどか』は彼の妄想を軸に考えられているようだ。

二人は五年ほど前まで友人関係を保っていたので、大方、ほむらが彼の妄想を助長するようなことでも吹聴したのだろう。

彼女は宗教でも作るつもりなのだろうか？

それにしても、今は僕らは偶然見滝原町で活動しているからいいものの、  
僕らが全く違う場所で活動していたとき、彼は大丈夫だったのだろうか？

こんなに陰鬱とした表情をみせていれば、  
とつくに魔獣に襲われていてもおかしくないのだが……。

暁美ほむらが隠れて援護射撃でもしているのだろうか？

正直、彼女なら例えアルゼンチンからでも  
彼を襲う魔獣を的確に打ち抜くなんてのもやりかねないと思う。

それはともかく、彼は心は今『寂しさ』や『悲しさ』でいっぱい  
だ。

魔獣のいいエサである。この状態で今日のような瘴気が濃い日に一  
人で出歩くのは――。

「あーあ、出ちゃったよ魔獣。何匹いるかなこれ。20超えてるね。」

「そうね。」

「……暁美ほむら。頼むから突然後ろから現れるのはやめてくれ。  
時々、本当に君が時を止めることができるんじゃないかと思っ  
てしまうことがある。」

「残念ながら今の私にそんな力はないわよ。」

「そんなこと知ってるさ。そして、そんな力がない君がなんのよう  
だい？」

「別に。最近、日本以外で活動することが多かったから。  
せっかくだから日本の音楽CDでも溜め買いしようと思っただけ

よ。」

「ふうん。で、彼の援護はいいのかい？」

「何言ってるの？あ、あなたは彼のことをあまり知らないんだっけ。」

何も知らないわけではない。

少なくとも、彼がただの一般人であることは知っている。

そして、今ほむらが彼を助けなければ確実に彼は命を落とすことも――。

……突然、目の前が白い光に包まれる。

魔獣も、この光も、見えているのは僕とほむらだけだろう。魔法に因果を持たないものには、見えないものなのだから。

だからこそ、不思議に思った。

鹿目タツヤを中心に放たれた白い光は、辺りの魔獣を一瞬にして浄化した。

何だこれは。

彼はなににも見えてないのか。

今彼は、自分の力で魔獣を消し去ったんだぞ。

彼は一般人じゃなかったのか。

いや、一般人だ。

だからなにも見えていないじゃないか。

僕が思考を巡らせていると、ほむらが憎たらしいほど自慢げな顔で僕の顔をみつめる。

僕がこの現象を理解できていないことを知ると、鼻でわらう。

「ふん、これでわかった？彼は『まどか』に守られているのよ。」

「『まどか』だって……？君がいつもいう円環の女神のことかい？君の話じゃあ、僕らには一切の干渉ができないって設定だったじゃないか！」

「この現象は私もよくわからないの。……でも、これをみていつも勇気づけられる。」

まどかは今も私達を見守ってくれているって、これが証明してくれているんだもの。」

ほむらは彼に気付かれないように魔獣が落としたグリーンフキューブを回収すると、

さほど濁ってもいないソウルジエムに近づけ、穢れを搾り取った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4146t/>

---

【まどか マギカ】もしも感情（こころ）があったなら。

2011年11月15日07時17分発行